

平成20年度 一王寺(1)遺跡 現地見学会資料

1. 調査概要

調査目的	遺跡範囲及び内容確認のための調査
調査期間	平成 20 年5月7日～6月30日(予定)
調査面積	約800㎡
検出遺構	竪穴住居跡(縄文中期)、土坑(縄文前期・中期)、 溝跡2条(弥生時代以降・不明)、捨て場・盛土遺構(縄文前期・中期・後期)
検出遺物	縄文土器(前期～後期)、石器、石製品、土製品

2. 一王寺(1)遺跡の歴史的環境

本遺跡は、八戸市庁から南へ約4 km、遺跡東側を流れる新井田川の段丘左岸、標高 10～20 mに立地しています。遺跡の現状は畑地・宅地・墓地で、緩やかな傾斜地となっています。

本遺跡は、大正 15 年に東北大学により本格的な発掘調査が行われ、縄文前期および中期の土器片や獣骨・貝殻などが出土したため、貝塚および集落遺跡として知られています。縄文前期・中期の代表的な土器として知られる円筒土器は、一王寺遺跡と、五所川原市オセドウ貝塚の資料から名付けられました。

八戸市では、平成6年より遺跡の範囲・内容の確認調査と、墓地造成に伴う発掘調査を実施し、縄文中期後葉・後期前葉・晩期の竪穴住居跡が発見されました。遺跡内には、縄文早期から晩期の遺物が散在しているため、縄文時代のほとんどの時期に集落が営まれていたものと思われます。

3. 今年度の調査成果

今年度は、昨年度に検出した縄文時代後期の捨て場のほか、遺跡南側に広がる畑の傾斜面を中心に調査地点を設定しました。調査はトレンチ方式で行い、縄文時代の遺構が確認できる地層まで人力で掘り下げを行っています。

昨年度から継続調査している国史跡指定地付近の調査区では、縄文前・中期～後期の遺物が大量に出土する、盛土された捨て場(④)が見つかっています。この捨て場は沢地形へと傾斜が始まる地点に時代の境目が見られます。傾斜面には縄文前期～中期が、北側の平坦面には縄文中期～後期の遺物が層となって見つかりました。さらに、縄文後期の捨て場の下からは、縄文中期の竪穴住居跡が見つかりました。

山裾から傾斜する畑地に設けた調査地点からは、縄文中期の竪穴住居跡・埋設土器(③)・配石遺構(②)・遺物包含層を確認しました。配石遺構は拳～人頭大の角礫を集め、一部弧状に配置したものです。

今年度の調査により、遺跡南端に竪穴住居跡と捨て場が広がり、中央の山裾に配石や埋設土器など祭祀に関連する遺構が点在するなど当時のムラの様子が徐々に分かりかけてきました。

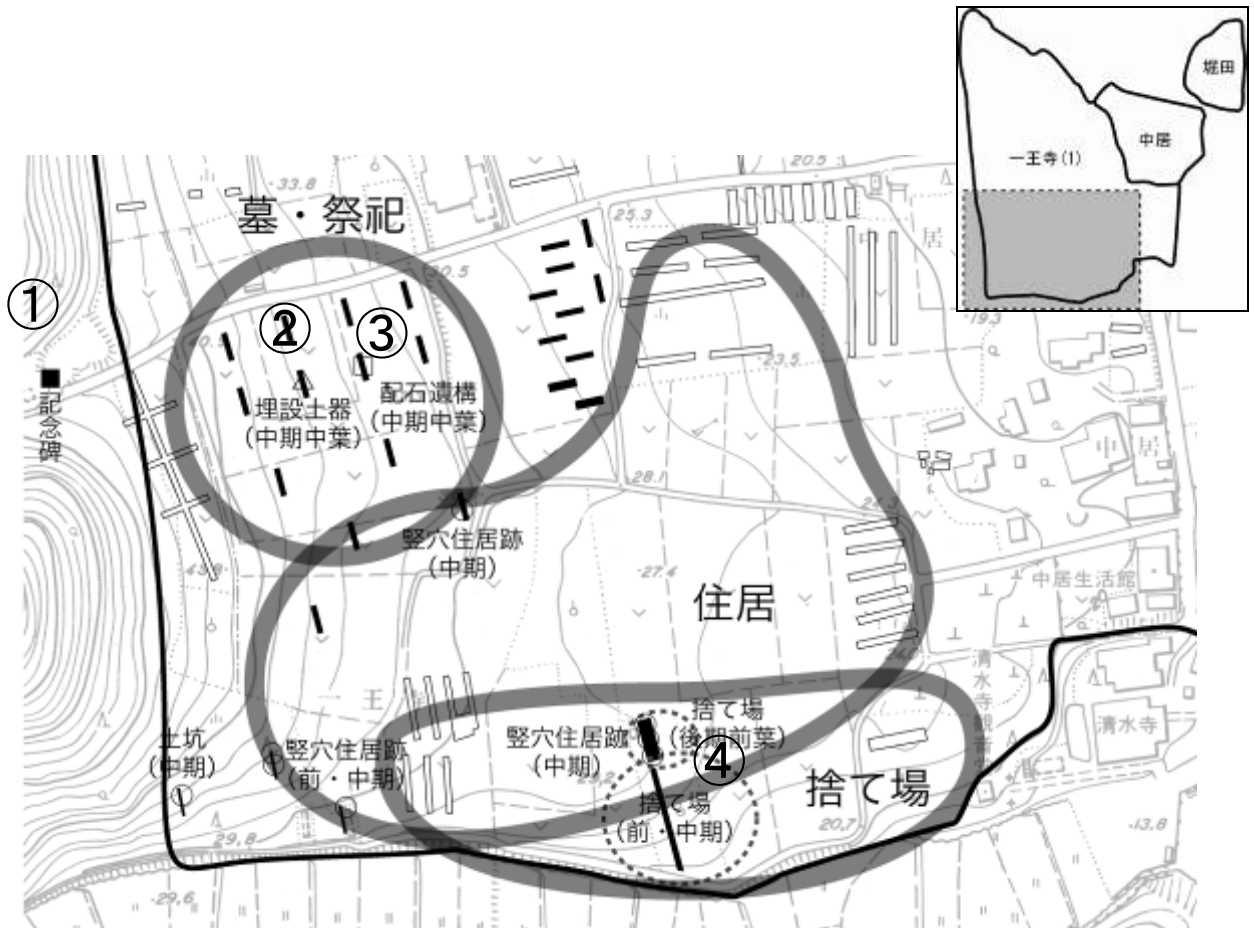


図1 調査概要



② 埋設土器（縄文時代中期中葉）



③ 配石遺構（縄文時代中期中葉）



④-1 捨て場（縄文時代後期前半）



④-2 捨て場（縄文時代前期～中期）